

# 生き方部会

## I. 研究の概要

### 1. 研究課題

「子どもたちが自己を見つめ、互いに認め合う心を育む教育はどうあるべきか」

### 2. 研究内容

#### 【第1分科会（ボランティア教育）】

**研究内容**: 子どもたちの生き方に反映できるボランティア教育について

**討議の柱**: アdapteDスポーツを通じて、子どもたちの生き方に反映できるボランティア教育について

#### 【第2分科会（コミュニケーション）】

**研究内容**: 「子ども理解」を中心とした教育活動の実践について

**討議の柱**: 子ども理解、教育相談、コミュニケーションの効果的な手法、用い方について

### 3. 研究方法

#### (1) 交流計画

研究内容領域ごとに2つの分科会に分け、各分科会で討議実践交流、意見交流を行う。

#### (2) 分科会構成

① ボランティア教育分科会

② コミュニケーション分科会

#### (3) 研究協議会の内容・方法

・南北合同開催での研究協議会をもつ

・今年度の会場について、ボランティア分科会は江別市立大麻中学校、コミュニケーション分科会は北広島市の夢プラザ

・2つの分科会でそれぞれに実践発表や講演、レポート交流などを行う

## II. 実践研究の経過と成果

### 1. 実践研究の経過

#### (1) 部会役員研修会による研究経過

日付	会議名・取り組み	内容
5月7日	第1回役員研修会	今年度の研究計画の概要確認
6月下旬	部会だより No. 91, 92 配付	
7月上旬	第1回課題部会事務局長研修会	この研修会を受け、役員で実践方法を検討・決定
8月上旬	第2回役員研修会	課題部会研究協議会の打合せ
8月下旬	第3回役員研修会	課題部会研究協議会の打合せ
9月3日	課題部会研究協議会	
10月上旬	第4回役員研修会	研究のまとめなど

#### (2) 部会役員研修会での研究成果

- ・課題解明に迫るための手段として実践交流が必要であると考え、今年度の研究を進めることができた。
- ・事前研修を行うことで、当日の研究協議について具体的な運営方針を立てることができた。

### 2. 課題部会研究協議会での交流

今年度は、講師を招いての研修会とレポート交流を行うことができた。

#### (1) 第1分科会 ボランティア教育

##### ① 理論研修の概要

- 研究内容：子どもたちの生き方に反映できるボランティア教育について  
～アダプテッド・スポーツを活用した障害理解教育の進め方～
- 講 師：大山 祐太 氏（北海道教育大学岩見沢校 アダプテッド・スポーツ研究室 准教授）

##### [講師による講演]

「子どもたちの生き方に反映できるボランティア教育について」というテーマの講演をしていただいた。一般的に存在してきたスポーツのみだと、スポーツに関わることができない人が出てくる。障がいがあるからできないのではなく、スポーツ側のルールや用具の工夫をすることで、障がいがある人も障がいがない人も、共に楽しむことができるようになる。また、児童生徒に対してアダプテッド・スポーツを活用した障害理解教育の授業を行った際の話もしていただいた。授業後の児童生徒の感想は、「かっこいい」「また授業を受けたい」「難しい」など、競技によって様々であることが分かった。子どもたちに各競技の魅力を感じてもらうためには、学校段階や各競技の特性を踏まえた場の設定や用具の工夫が必要である。また、ルールや歴史、プレーの難しさを伝えるのも大事ではあるが、容易に楽しめるような機会提供が再度の実践意欲を喚起し、積極的な学習につながることが分かった。



## [実技研修]

### 「アダプティド・スポーツの実践」

ボッチャ、アンプティサッカー、各種車椅子スポーツ、ブラインドサッカー、フライングディスク、ゴールボール、フロアカーリングのブースを設定し、参加者は自由に用具を手に取り各競技の体験を行った。公式ルールの順守よりも「触れてみる・やってみる」ことを重視した体験内容であった。「ルールや歴史、プレーの難しさを伝えるのも大事ではあるが、容易に楽しめるような機会提供が再度の実践意欲を喚起し、積極的かつ学習につながる」という講演で学んだ内容を、実際に体を動かしながら体験できることで、より理解が深まる有意義な実技研修となった。



### ② レポート研修

今年度も各校からたくさんの実践レポートが集まり、交流することができた。昨年度に引き続き、今年も「モルック」についてのレポートが複数見られた。モルックは今年度、世界大会が函館市で開催され、興味関心が高まっている種目の一である。また、実際に用具を準備してアダプティド・スポーツを実践した事例や、専用の用具がなかった場合の工夫について紹介するレポートなど、様々なレポートが集まった。昨年度までの大山准教授の講演内容を踏まえた実践事例も多々あり、本研究が実際の現場で幅広く活用されてきていることが実感できた。

### ③ 成果と課題

研修後のアンケートには「普段触れることの少ないアダプティド・スポーツを体験することができて良い経験となった」「新たな視点を持つことができた」「障害があってもルールや道具の工夫したいで一緒に活動できる点に興味がわいた」という声が見られた。一方、「講座が長かったので休憩をこまめに挟んだ方がいい」等の声も見られた。第一分科会では、講師による講義後、実際に体を動かしながら講義内容を復習することでここ数年研究が深まっている。参加者の感想を見ても、研究方法に魅力を感じ、参加して下さっている方が多く見られることが分かる。

また、アダプティド・スポーツに取り組んでいる学校がより増えてきていることも感じることもできた。生き方部会事務局では、「ボッチャ」の道具の用意があるので、ぜひご活用いただきたい。自分たちの研修から感じたことや学んだことを子どもに還元できるこの部会のよさを大切にし、今後も研鑽を積んでいける部会を目指していきたい。

## (2) 第2分科会 コミュニケーション

### ① 理論研修の概要

- 研究内容：「子ども理解」を中心とした教育活動の実践について
- 講 師：宮原 順寛 氏（北海道教育大学 大学院 教育学研究科 准教授）

前半は事例について検討し、後半は講師による講話と質疑応答、その後レポート交流を行った。

### 【事例検討】

川本教諭から学級の事例が提供された。その後、参加者からの質問に川本教諭が答えることで、対象学級をより深く理解、共有する時間をもった。その後、授業の様子について川本教諭から説明があったあと、実際に授業を参観された宮原准教授から子どもの見取りと分析の説明がされ、それを受け再び川本教諭による思いが述べられた。学習規律を気にしてしまう授業者に対して、宮原准教授は「それはそこの居るための情動調整行動」という考え方もあると述べられ、これは講話の中でも2つ目の事例と共に触れられた。



## 【講師による講演】

### 講演内容：「子ども理解」を中心とした教育活動の実践について

まず最初に、宮原准教授の優しい人柄と柔らかな口調で、川本教諭の学級の実態と語りの言葉について丁寧に分析をされた。その中で、「自分の学級」ではなく、「彼らの学級」と捉えていくことで、担任が一人で抱え込まず、職員全員で子どもと関わっていくことを提案された。その後に、小学校の授業の事例を使って、学習規律に焦点を当て、実際に宮原准教授が撮った児童の写真を見ながら、子どもの動きの変化を分析し、授業を乱している行動を「情動調整行動」と捉えることで、子ども理解の入り口になるのではないかというお話をいただいた。子どもの動きの変化を分析し、子ども理解のための新しい視点を教えていただいた。

- ・学び合いを深めるためのはずの学習規律が、むしろ、子どもの心身を縛るための鎖になっていないか
- ・子どもは満たされない思いを持ちながら、今ここに居残るためにサインを出しつつ、情動を調整しながら堪えている
- ・子どもは辛抱強く何度も教師に期待してくれている



## 【レポート交流】

2～3人1組で感想を含めた10分間のレポート交流を行った。最後の感想の場面では、参加者から学習規律の乱れと思われるがちな行動も、学び続けるために子どもたちが調整してくれていると考えることで、教師や授業者は自分を責めずに済むということ。新しい視点をもっていることで視野も広がり、子ども理解の一歩を踏み出せることなど、参加者からは明日からも頑張りたいという声が出ていた。



## ② 成果と課題

**成果**：「子ども理解」を柱に、事例検討、実践授業の分析、講演、レポート交流まで一貫して行えたことや、参加者それぞれが日常実践を振り返る良い機会になったことが、大きな成果である。

実際に、有意義な研修だったという声が多かった。以下、アンケートより一部抜粋する。

・情動調整行動という言葉を聞いて、子どもの顔を思い浮かべました。見方を変えることは難しい時もあるので、他の先生方との対話を大切に、いろんな視点から子どもたちを支えていきたいなと思いました。・考え方や見方が大切だなあと感じました。小さな変化を認めて声をかけること。情動調整行動を頭に入れて意識して見ることで、授業改善や関わり方の工夫に繋がっていくなと思ったので、見ていきたいと思います。・情動調整行動について、肯定的に見る視点を学ぶことができた。『O地点を低くする』ということについて。否定的な見方を変える、という点についてはそういう見方もあるとは思うが、それでいいと言ってしまっていいのか不安もある。教室を出て行ってしまう生徒を肯定してしまったら、出たいけど出ないで頑張っている生徒は報われないのでとも思う。正義が通らないことが仕方ない、ではいけない気持ちにもなる。・同じ物事でも見方で変わることを再度自覚した。一人ではなく、みんなでということも大切だと思った。

**課題**：特に部会員からはなかったが、次年度に向けても所々に交流の時間を挟みながら、部会員同士で会話ができるようにし、多様な視点や見方を交流できるようにしていきたい。

## III. 部会研究の成果と課題

今年度も分科会形式を採用することで、それぞれのテーマについてより深く研究を進めることができた。また、昨年に引き続き、今年度も第1、第2分科会とともに北海道教育大学の教授を講師に招き、理論の研修に重点を置いた研究会を計画した。研修を通して、日常的な実践を行うだけではなく、基礎となる理論を正しく理解した上で実践を重ねることが重要であるとあらためて考えることができた。

今年度は実際に講師が中学校と小学校の授業を事前に参加し、その時の写真を提示することで、対象学級や生徒、児童をより深く理解、共有することができた。

(文責 東館 勇貴／川本 しのぶ)